



第十九回 『殉愛(仮)』と雑パンIII世

考え



クツは舐めるだけ!

草は食むだけ!

これが噂の格差ダイエット!!

弦楽器イルカ  + 友人

ここくどいから書くつもりなかったんだけど、前回の続きで映画版『寄生獣』についてちょっとびっくりした出来事を書いておく。

まず『寄生獣』という作品に関する基本的な認識について、すでに何回も書いてるけど、原作においてミギーたちは「パラサイト」「寄生生物」と呼ばれていて、一回も「寄生獣」とは呼ばれてない。つまり彼らは「寄生獣」じゃない。

だが作中、ある生物を一回だけ「寄生獣」と呼ぶ箇所がある。

つまり言葉には出されてないけど、「タイトルの寄生獣とはいったい何か」を問うのが原作の核心的テーマの一つになってる。

この認識はもう当たり前で、最近の新聞や雑誌でもミギーたち「パラサイト」を、「寄生獣」って紹介する記事はまずほぼないし、そもそも俺が今回借り直した原作の愛蔵版には読者からの「寄生獣とは〇〇のことですか？」って質問に作者が回答するページもあった。

だから未だにミギーたちを「寄生獣」って呼ぶ読者は、同じ作品を俺とは別の文脈で読んでるんだと思ってた。まあここまではよくある話だ。

ただ驚いたのが、NHKラジオに出てた映画版の監督本人がミギーたちを「寄生獣」「寄生獣側の人たち」って連呼してた。それをパーソナリティーが「パラサイト」っていくら言い直しても全っ然気にしてなかった。

たぶんこの監督が作った映画版『寄生獣』は原作を完膚なきまで換骨奪胎して乗っ取った、まさに本当に本物の『寄生獣』だね。ここにいたんだよ、俺が探してた本物の『寄生獣』が。

これは流行る。俺みたいなクソバエは理屈ばっかこねるけど、真逆の層とかに大ヒット間違いなしだと思う。だいたいあれだけ完成度の高い原作使って、つまらない映画作るほうが逆に難しいワケだし。カレールーと一緒に、不味くしようがない。ただ俺がこの映画を観ることはないとも感じたけどね。原作が再評価されて何かを考えるきっかけになったらいいんじゃないかなあ。

さて、前回のあらすじ（超長いので要約しました）

「でも俺がここで格差社会を善悪で語っても大した意味はない。善悪なんて人間が共同生活する上で作った便宜的な概念だし、弱肉強食の均質な社会を生き残るには戦うための言葉を自分で考えるしかないからだ」

前回のUの手紙に突っ込もうか迷ったんだが、笑い話になるレベルで言うと、アイドルの話は熱弁しすぎると逆効果かもよ、って思う。

あのアイドル集団の一人一人は丸刈りの子も含めてみんないい子で、薄給で頑張ってるらしいと俺も思うから、好みの子を応援するだけで充分じゃないかな。その人気が裏で仕組みられてるかどうかとかは、あんま重要じゃないと思う。そこはプロレスと一緒に、アイドルnドリームという名の白昼夢でいいんじゃない？

公然の事実として、彼女らは全員鶉で、魚よろしく飲み込んだ金は鶉匠面した大人たちが裏で

回収してる。よね？秋葉原のサラリーマンたちはそこに自分を投影して、同じ境遇の不憫な彼女らを応援してんでしょ、意地悪く言いすぎてるけどさ。

正直、俺にはその縮図だけでお腹いっぱいだわ。金の量だけ陰謀も集まる（し、波の数だけ抱きしめる）あの業界で、俺みたいな一般人から見える部分はほんの表層に過ぎない。しかもプロデューサーが業界の中心を何十年も仕切ってきたあの人の人なワケだから、基本なんでもアリじゃない？ ミッキーとかふなっしーの中の人と一緒に、それこそイリュージョンの部分じゃないかな。

たとえば『殉愛』って本、ネットをちょっと掘っただけでも俺ごときには手も足も出ない魑魅魍魎どもが地虫のごとく湧いて出る感じも怖いけど、大々的に宣伝してたマスコミが急にピタッと何も報道しなくなる、サメを前にしたイワシの群れがギラッとひるがえるみたいな方向転換っぷりが見事だよ。事務所の力とか、在日ってワードの扱いづらさとかが関係してるらしいけど、そのくらい権力にびたっとなびくのがあの業界だろう。「金が一極集中する芸能界ですがクリーンで陰謀ゼロです」って考える方が非合理的だから、そこは一周回って裏読みせずアイドルが演じる夢を素直に信じるか、全部無視するかだと俺は思う。

被曝と病気の関係性と一緒で、熱弁ふるえばふるうほど（U自身がしてるみたいに）鼻で笑われるかもよ。

つまりつまったついでに書いちゃうと、たとえばね。

「世界保健機関（WHO）の元アドバイザーで放射線生物学者のキース・ベヴァーストック博士（チェルノブイリ原発事故後の甲状腺がんの増加をいち早く発見した人らしい）が20日、外国人特派員協会で記者会見を行い、国連科学委員会（UNSCEAR）2013年報告書について、科学的ではないとの考えを示した。また原子力産業との関係の強い委員が占めている同委員会は解体すべきだと厳しく断じた」ってニュースがネットでは読めるけど、全然報道はされてない。

「事故後1年目の日本国内の公衆集団線量について、18,000人・Svと推定している事実をあげ、『この数字から予測されるのは、2,500から3,000症例のがんの過剰発生である。』と語気を強め、『これらは、「予想されない」がんではなく、「予期される」がんである。特定の個人のがんが放射線由来であるかを同定することはできないかもしれないが、確かに発生するものだ。』と述べた」って書かれてる。

こんな話も結局、右と左の争いの一部として無意味化される。アイドルの話もそれと一緒にだよ。熱弁したら信じる人もいるかもしれないけど、はなから信じない人には何を言っても信ぴょう性がないってあしらわれる。だから結局は自分の考えを信じるしかない。

ただ被曝と病気の話ですごいのは、原発推進派の学者側もだんだん「関連が全くないワケじゃないかも」って日和ったデータを出し始めてるのに、それを報道しない率も上がってるとこだよ。「〇〇でしたが関連はないと結論付けられました」って報道さえしなくなってる。

前回は引用した、福島県の第4回県民健康調査の資料で、「18歳以下の甲状腺がんが100人を超

えて診断されている現状は、通常の61倍にあたり、何らかの要因に基づく過剰発生」かもしれないって指摘されたこととか、「第13回東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う住民の健康管理のあり方に関する専門家会議」の資料に、「WHO 報告書における住民の健康影響評価」では、「最も汚染が顕著であった地域の1歳児では、ベースラインリスクに対する生涯寄与リスクの割合として甲状腺がんについて数十%、白血病、乳がん、全固形がんについて数%、罹患の生涯寄与リスクが増加すると計算されたが、ベースラインリスクがもともと小さいため、過剰発生は少数にとどまることを指摘している」って書かれたとか、その会議で「県境で区切るのは非科学的、福島県以外も被曝してる」って意見に対して「福島県外の被曝量は低い」「放射能は、離れて行くほど低くなる、これが常識的知識」って主張する県立医大の委員がケンカになったとか、全然報じられない。

これが既定路線ってヤツだよ。アイドルについて俺は全く知る気がないからわかんないけど、被曝と病気に関する報道の流れはたぶん初めから打ち合わせされてる。国民の大半もこの流れが心地いいんだろう。アイドルを信じるのと一緒にね。それは善悪でも科学でもなくて好みじゃないのかな。

だからいいじゃん、別に好きならどうでも、人気の出どころが実は宗教でもいいじゃん、アイドル教祖にお布施払って祈祷すればいいじゃん、佐藤とさの一神教でいいじゃん。って思ったよ。信じる者は何とやらだよ。

今回は「これは国語の問題だ」って決めゼリフを流行らせようと思うんだ。今年の流行語大賞を狙いたい。もう終わったけど。

首相の解散会見を与党の公式HPで読むと、「この春、平均2%以上、給料がアップしました。過去15年間で最高です」って書いてる。これは前回書いたとおり、たとえば「サラリーマンなど年収3年ぶり前年比増」ってNHK記事の、「年収別でも、1000万円を超える人が前の年より14万人増えて186万人、全体の4%となった一方、200万円以下の人は30万人増えて1120万人に上り、全体の24.1%を占めていて格差が広がった」って話とつながってる。

俺がもし首相だったら、「格差最高です。貧乏人は草でも食んで、金持ちに媚びへつらってください。いくら努力しても介護士とか保育士とか原発作業員みたいな現場労働者には大した賃金あげませんが、献金をくれる金持ちはちゃんと優遇します。それが国益であり、反対するのは捏造売国奴の国賊です」って正直に言うと思う。それがフェアだろう。

でも首相は「都市と地方の格差が拡大し、大企業ばかり恩恵をこうむっている、そうした声があることも私は十分承知しています。それでは、日本の企業がしっかりと収益を上げるよりも前に、皆さんの懐から温まるような、手品のような経済政策が果たしてあるのでしょうか。また、ばらまきを復活させるのでしょうか。その給付を行うにも、その原資は税金です。企業が収益を増やさず、そして、給料も上がらなければ、どうやって税収を確保していくのでしょうか」って言ってる（その割に地域商品券バラ撒くチープな手品を計画してるようだけど）。

上記をまとめると、首相はあの解散会見でいったい何が言いたかったのか？

つまり、「国民の1割が年収200万円以下でも、金持ちが増えて見かけの賃金が上昇するのでア

ベノミクスは成功です。また皆さんの懐から温まるような愚策はしません、総額で約19億5400万円の献金をくれる大企業中心に儲かるよう頑張ります」って解答になる。もちろんふざけて書いてる部分はあるけど、自分でもちょっと悲しいくらいそれほど大きくは誇張してないと思う。

これは国語の問題だ。さて流行るかね、これ。

あと遺伝の話は、極論すると「大人になって勉強するかどうかもすべて遺伝です」って話になりそうな気がする。ガンや白血病が割と遺伝しやすいとか、親が高学歴なら子も高学歴になるって話は聞いたことがあるけど、それも遺伝が関連する部分と、後天的な事情もあるよね。双子をアフリカと日本で育てたら、食べ物や生活習慣の違いで死ぬまで差が出ると思うし。そもそも遺伝で差異が出るのは当たり前だ。後天性で差異が出るのも当たり前だ。だったら統計は取れても、どこまでが遺伝性でどこまでが後天性かを明確に線引きするのは不可能じゃないかな？ 遺伝に負けず勉強しろって話かとも思うけど、でも根気も遺伝するってなると最終的にはDNA陰謀論になるよね。

俺からすれば、それこそ子供の甲状腺ガンが放射線由来か遺伝由来かも不明な世の中だから、遺伝か後天かは結局当たらずも八卦みたいな気がするよ。

さて今回はこんな感じ。

どうかな？



「はみだしウマシカさん その6」

雑パン三世 2時間スペシャル

♪ちゃら、っちゃ。ちゃら、っちゃ。ちゃら、っちゃ。ザパンザサード！わお！

事件は雑パン（以下ザパン）の予告状から始まる。

「本日、深夜0時、殉愛（仮）をいただきに参上する。ザパン三世」

「これですか、ザパンの予告状は、どれどれ、最近老眼がひどくて、なるほど。ザパンはあの有名なダイヤモンド、殉愛（仮）を狙っておるわけですか。あなたが所有している、100カラット、時価数十億円でしたかな。しかし私、雑ニ形（以下ザニ形）が来たからにはもう安心です。ザパンは必ずや、私が捕まえてみせます！」

「いや、ザニ形さん、残念ですが、もうその必要はありません」

「なんですと、インターポールの警備体制を疑うのでありますか？ 雑ゲイツさん（以下財津さん）。確かにあなたは大金持ちで、ドーベルマン100頭、傭兵50人を常に屋敷に巡回させていることは承知しております。しか～し、ザパンにとってそんな警備はザルも同然です。ヤツは我々常人には思いもつかぬ盗みを働くのであります」

「いや、そうじゃないんです。実はもう、盗まれたんです」

「は、何をですか？ まさか心とか冗談は言わんでください……」

「殉愛（仮）、今さっき、盗まれたんです」

「ぬわぁんですと！ 失礼します！ おうのれザパン、卑怯者め、逮捕だー！」

壁にぶつかりながらわちゃわちゃと駆け出していくザニ形警部たち。それを見ながら、ニヤリと笑う、財津さん。

場面転換。

「今回のヤマはぬかりなしだろうな、ザパン」

「まかせときなって雑元。俺様の下調べが雑だったこと、あるか？」

「ザパン、前回もつまらぬ物を斬らせたこと、忘れたとは言わせぬぞ。ザパンが油断しておらねばあんなことには」

「わあってるって雑右衛門（以下ザツえもん）。今回はちゃぁんと半年かけて調べ上げたって、あの財津屋敷の警備体制をな」

ザパンがフィアットのハンドルを握り、助手席に雑元、屋根にザツえもんが胡坐で座っている。

「今回は二人の手をわずわせるようなマネはしな……」

車の前に突然、男が飛び込んでくる。

「え？ わわ！」

急ハンドルを切るザパン。車が電柱に激突。

「いててて。おい、ちきしょー、どこ見て……」

男、道路の真ん中に倒れている。

「おいザパン、お前轢いたんじゃないのか？」

「なーにをバカなことを、俺の運転テクを甘く見るんじゃないかねーっての」

男に近寄るザパン一行。

「おい。ちょっと、おに一さんよ」と雑元。

仰向けにしようと持ち上げた男の懐から、ダイヤモンドが転げ落ちる。

「え、これは」と雑元。

「殉愛（仮）……」

「なんだと？ ザパン」

「拙者の聞き違えでなければ、これから盗むはずのそれが……」

ザパンの真剣な目線のアップ。

すると突然、銃を持った黒づくめの男たちが現れる。男とザパンに気づき、問答無用でマシンガンを乱射する。

「おいおい、なんだって一の、いきなりよお！」

「逃げるぞザパン！ ザツえもん、頼んだ！」

「早速拙者に頼るとは先が思いやられる……」

三人、ぶつぶつ言いながら軽い身のこなし。マシンガンの弾を雑鉄剣で跳ね返すなどして、男を抱えながらその場を逃げ出す。

場面転換。

アジトのロッジに戻り、男を介抱しながらカップラーメンをすする三人。

「なんだってこんな目に合うのかね、ったく」

「しかしザパン、お目当てのお宝が手に入ったんだ。今回のヤマはこれで一見落着だな」

「そうござるな。これを食い終えたら、早速今回の報酬を」

「いや、話はそう簡単じゃねえよ、お二人さん」

テレビでニュース速報が入る。

「臨時ニュースです。ザパンがあの世界的に有名なダイヤモンド、殉愛（仮）を盗みました。今回ザパンは卑怯にも、予告時間より半日以上早く盗みに入ったとのことで、警備に油断があったと思われます！」

「おいおい、濡れ衣で人を卑怯者呼ばわりしやがって」

「ザパン、そりゃお前の気持ちはわかるさ。せっかく半年かけて調べたお宝が、こうもあっさり向こうからやってきた上に、こんな濡れ衣着せられたんじゃ、おさまりがつかねえのも無理はないが」

「しかし、お宝はお宝でござるし、最近いりようでござるからして」

「なんだ、ザツえもんは金欠か？」と雑元。

「恥ずかしながら、家賃滞納がたたって大家に締め出しを……」

「かー、そんなしみったれた話じゃねえよ、これは」とザパン。

「あら、ザパン。今回のお仕事、ずいぶん早く片付けたみたいねえ」

玄関のドアから、雑二子（ザジ子）ちゃん登場。

「しみったれとは失敬な、ザパンの盗みが毎回うまくいっておれば拙者も……」

（無視して）「これはこれはザジ子ちゃん、今日はまたどうして？」

「もちろん、あの噂に名高いダイヤを一目見せてもらえれば、と思って。あら、その人だあれ、どうしたの？」と言って男に気づく。

「いやあ、そんなことよりもダイヤ見せたらお礼に、ザジ子ちゃんのああんとかやこおんなども見せてもらえちゃったりするのかな〜、ぬあんちって」

「いやあね、ザパンのえっち。でも本当にそんなことで見せてくれるのかしら？」

「ダメだぞザパン、ザジ子に見せたらすぐ盗られちゃうからな」

「そうでござるよ、すまぬがザジ子殿、ここはお引き取り願いたい」

「なによ、ケチ、あんたたちには聞いてないわよ。ねえザパン、お・ね・が・い♡ここじゃ邪魔者がいるから、あたしの車でゆっくり、ね♡」

投げキッスしながら外に出ていくザジ子。

「ん〜、俺はダメな男だ〜。いまいくよ、ザジ子ちゃ〜ん」

ザパンも外に出ようとする。

「おい、ザパン！」「待つでござる！」

雑元らのタックルを軽くかわし、ザジ子の車に窓から飛び込むザパン。しかしその数秒後、身ぐるみはがされ車外に放り出される。

「いつもありがと、ザパン、それじゃまたね〜」

胸元にダイヤをしまったザジ子の車がさっと走り去る。

「あんれま、ザジ子ちゃん、ひどいんでないか〜い」

「おいザパン、またやられたぞ」「いつもの油断でござるよ！」

ザパン、振り返って。

「ぬあんちって、ホラ」

そう言って、パンツの中から別のダイヤを取り出す、ザパン。

「お前、泥棒より手品師のほうが向いてんじゃないか〜？」と雑元。

「バカ言え、俺はあの泥棒アルセーヌ・ザパンの孫……」

男、目を開ける。

「お、気づいたみてえだぞ」と雑元。

「ザ、パン？」男、周りを見渡す。

「やっと気づいたな。おい、傷は痛むか？」と雑元。

「ここは、どこだ？」

「妙な奴らに追われて瀕死のところを、俺たちが助けてやったんだ。なあ、ザパン」と雑元。

「ザパン、お前が？」

「お、俺の名前もちったあ有名になったってことかしら」

「ふざけるな！」

「え？」

「道楽で泥棒ごっこしてる奴に何がわかる！」

急に怒り出した男、ザパンが持っているダイヤに気づく。

「それは、返せ！」

ダイヤをひったくり、外に出ようとする男。

「おい、無理に動くとな傷にさわるぞ」と雑元。

「触るな、お前らなんかに、殉愛（仮）を渡してたまるか！」

「さっきから、ちょっと落ち着けよ」

「うるさい！ うっ！」

雑元の銃で当身をされ、気絶する男。ダイヤが地面に転がる。

「なんだこいつ、ザパンの知り合いか？」

「いや、全然知らねーが、それより、これを見てろよ」

床に落ちたダイヤを思いっきり踏みつけるザパン。

「おい、なにやってんだ！」 「ザパン、気でもふれたか？」

「よおく見ろってお二人さん」

ザパンの足の下で、ダイヤが砕けている。

「ダイヤが、粉々に砕けやがった」

「やっぱりな。よくできてはいるが、こりゃ、ニセモンだあ」

「なんだって？」

「こいつはなにやら裏がありそうだぜ」

テレビでは、財津さんがインタビューに答えている。

「幸い保険には入っておりましたが、ダイヤを盗まれたのは本当につらいです」

ニヤリと笑うザパンの目線のアップ。

カタカタ、カタカタ、タイプライターの音。一文字ずつ、字幕。

「殉愛（仮）は雑にゃ盗めない」

「おいザパン、カッコつけてもパンツいっちょじゃしまらねえぞ」と雑元。

「ありあり〜」 ずっこけるザパン。

場面転換。

夜、暗闇にライターが点く音、タバコに火がともる。

カーテンが風で揺れ、月明かりで窓のそばに立っている人影（ザパン）が浮かび上がる。

豪華なベッドの上に寝ているのは財津さん。気配で目覚める。

「おっと、動くな。動いたら命はねえぞ」

起き上がろうとするが、枕元に立っている雑元が額に銃口を向けていることに気づく。

「...おまえは、雑元か。ザパンの子分だな？ 何しに来た。警備は何をしている」

「俺は子分じゃねえ」

「まあまあ雑元。財津さん、いい子は早寝するもんだぜ。あんたのいい子ちゃんたちは、今頃はそりゃあいい夢を見てるんじゃないかな」

窓から見える庭で、たくさんの犬や人がグーグー寝ている。

「...さすがだな、ザパンとやら。しかしここにはもう殉愛（仮）はないぞ。ある男に盗まれてな」

「そうかい。その男ってのはやっぱ、ザツヤネン系ザシキ人のザカジン。あんたに相当な恨みを持ってると噂の」

場面転換。

男、目覚める。その隣にザジ子ちゃん。

「あんたは.....」

「あら、お目覚めね。あたしはザジ子」

「ザジ子？ ザパンの仲間か？」

「仲間？ そうね、今は。でも敵になるときもあるのよ」

「敵？ いや、どうでもいい。あんたらの世話にはならん」

立とうとする男。

「起きないで、ザカジン。傷に響くわ」

「どうして俺の名を」

ザジ子ちゃん、横たわるザカジンの手を握る。

「ザパンに言われて、ちょっと調べたの。殉愛（仮）はザシキ人の長が代々継承してきた由緒ある宝石、ってこともね」

「そんなことを調べてどうする？ 俺たちザシキ人は、財津さんらに国を追われ、大勢殺された。俺の家族、妻や子どもたちも。そして、家宝であり民族の誇りである殉愛（仮）も財津さんらに盗まれた。だがあんたらには関係ない」

場面転換。

「なぜザカジンにニセの殉愛（仮）を盗ませた？」とザパン。

「ふっふっふ。傭兵たちの情報網で、ザカジンたちが私の殉愛（仮）を盗もうと計画しているのがわかった。ザカジンごときにこの財津屋敷の警備網が破れるワケはないが、念には念を入れておきたい。そこへザパン君、君からの予告状が舞い込んだ。これは面白い見ものだよ。早速、私がザカジンの連絡先を調べて直接電話した。コソコソ嗅ぎまわるのは勝手だが、モタモタしていると大事な誇りをザパンに盗まれるぞ、ってね。ザカジンの狼狽ぶりと言ったら、滑稽というほかなかったわ」

場面転換。

「どうしてあの日、殉愛（仮）を狙ったの？」とザジ子。

「先にザパンに盗まれて闇の質ルートにでも流されたら、もう取り戻す術はない。何年調べても殉愛（仮）の在り処を突き止めることはできなかったが、とにかく財津屋敷に乗り込んでザカジンと刺し違えてでも奪い返すつもりだった。……だが結局俺は、一緒に忍び込んだ仲間たちを殺され、更に殉愛（仮）のニセモノをつかまされたってことか」

場面転換。

眉間に皺を寄せるザパン。

「ザカジンが俺と出会ったのも、あんたの差し金か？」

「いやなに、ちょっとした余興だよ。明日には、ザパン一味が仲間割れで同士討ちって記事が新聞の一面を飾る手筈になっている。今頃君のアジトには傭兵たちが潜入している。彼らはその手の工作のプロだ。君も知っているだろう、このターヒャク・ラクーサ国で今何が起きているのか。正義の女神は金と権力をアソコにぶち込まれると非常に従順でね、法規制がゆるい私設軍隊は人を殺しても治外法権でおとがめなしだ。邪魔なザカジンたちも殺せて、保険金まで手に入る。それもすべて君のおかげだ、ザパン君」

「ほほう。俺にそこまでしゃべるってことは、ここから生かして帰さねえつもりか？」

ニヤリと笑った財津さん、右手に持ったりリモコンのスイッチを押す。壁一面に機関銃が現れ、銃口がザパンを狙う。しかしその後、何も反応がない。カチ、カチ。何度もスイッチを押す財津さん。

「ちっ、どういうことだ」焦る財津さん。

「あれれ、故障しちまったのかねえ。でなきゃ誰かが先に去勢しちゃってたりして」

ザツえもんが雑鉄剣をわずかにカチリと鞘にしまうと、一斉にバラバラと崩れ落ちる機関銃。

「…ほお、なかなか手際が良いな」と財津さん、そう言いながらリモコンの別のボタンを押す。各待機所にいた傭兵たちが異常に気づき寝室へ向かう。

ザパン、それに気づかず、

「それもこれも、殉愛（仮）を盗むために、半年間みっちりこの屋敷を調べ上げたおかげさ。もちろんそれだけじゃない。肝心のモノホンの殉愛（仮）も、すでに俺様がいただいた」

「ふ、何を言うかと思えば。君は相当マヌケなコソ泥のようだね、ザパン君。本物の殉愛（仮）の在り処はトップシークレットだ。君がいくら探ったところで知る由はない。しかも、摘出することが絶対不可能な場所に保管してある」

夜風が寝室に流れ込み、ゆっくりとカーテンを揺らす。

「…あんたの体の中、だろう？」とザパン。

驚く財津さん。

「ほお、意外だ、よく調べたな。医療班の数人以外は口封じしたのに。だが、だったら話は早い、君もわかっているだろう。殉愛（仮）は私の腹を八つ裂きにするか、最先端の医学的施術がなければ絶対に取り出せない仕組みになっているんだよ。

ザパン君、今回の件で君のことを少し調べてみたが、特に最近の君の盗みには大義も覚悟もない。なんとなくそれっぽい宝石を派手なアクションで面白おかしく盗んだ気になっているだけだ。

所詮搾取される側のお前みたいなコソ泥に、私を血みどろに切り刻む覚悟などない。だろう？」

「さあてなあ。ご大層な説法だが、そいつあとんだお門違いだぜ、財津さん。大義やら覚悟なんて俺みてえなコソ泥にゃ荷が重すぎるわ。俺はただ、狙った獲物は命に代えても盗み取る、それだけよ。アルセーヌ・ザパンの名に泥は塗れねえからさ。ってなワケで、これなーんだ。ほれ、雑元」

ザパン、パンツからダイヤを取り出し、雑元に投げる。

雑元、ルーペとダイヤを寝ている財津さんの目前にかざし、検分させる。

「...ん？ これは、本物のダイヤ、この大きさ、このカット、まさか！」

雑元、さっと懐にダイヤをしまう。

「そのまさかのまさか担いだ金タロ飴ちゃん」

「バカな、盗めるはずがない、しかし.....」 混乱する財津さん。

「この半年間、そりゃ調べ上げるのにはずいぶん苦労したぜ。でもこっちにゃ、斬れぬものはないまさに斬り札、ザツえもんちゃんが控えておりますからして」

ザツえもんの流し目がギラッと光る。

「ふ、時代遅れのサムライか、たかだか日本刀で何ができる」と財津さん。

「あらら、ザツちゃんのことまで調べてたの。でも調べ方が雑じゃないかしらん。斬りつけたカエルを傷つけることなく、下にある岩だけを叩き斬る波紋流奥義を体得した拙者なら、皮膚に傷をつけることなく体内のダイヤを取り出すなど造作もないでござる。だよな、ザツえもん」

無言で目が光るザツえもん。

「なんだと、そんなバカな」と財津さん。

「それよりも、今、あんたの体内に何が代わりに入ってるか、そっちを心配したら？」

「なに？」

「マスコミが金と権力に弱いのはどの国も一緒でね。この前爆発した発電所からプルトニウムを含むいろんな汚染物が飛び散ったままになってるって話、ほとんど報道もされないし、何が何個どのくらい降ったのかも確認できてない。その数は不明、ってところさ。そこでこの前ピクニックのついでにゴミ拾いしてきたんだが、簡単に捨てられない違法なゴミだから、リサイクルもかねて、財津さんの体内に入れ替えさせてもらった。大丈夫、ただちに影響はない例のアレだから」

「バカな。まさか」

そこで、傭兵たちが寝室になだれ込んで来る。

「おいでなすったか。じゃ、殉愛（仮）はありがたくいただいてくぜ」

さっと窓から飛び降りるザパン一味。

「く、ザパンを殺せ、いや、誰か、医療班を呼べ！」

慌てふためく財津さん。

場面転換。

手術室に横たわる財津さん。ぐるりと白衣の医者に囲まれ、腹部あたりを内視鏡で手術されている。

「まだか、まだ取り出せないのか？」

「もうすぐです。…はい、取り出し完了しました」

アルミ皿の上にピンセットで、白い特殊な布にくるまれた物体が置かれる。

「財津様、ダイヤをご自身で確認なさいますか？」と医師。

「いや、触れたくない。それよりもガイガーカウンターを早く」

「ありゃりゃ。こりゃすっげえ値です、ビンビンですぜ」

スタッフがカウンターを近づけると、とんでもない音が鳴り響く。

「プルトニウムの塊ですぜこりゃ。おっサムライ、おっそろしい！」

ぐったりと冷や汗を流す財津さん。

「財津さまぁ、お気を確かにい。お水をお持ちしましたぁ。ああ！」

水を持ってきた別のスタッフが転んでしまい、水が財津さんにぶちまけられる。

「ゲホゲホ、ばかな、何をやっている。そんなことよりも、そのゴミを早く遠くに捨ててこい！」

「へえ。どこに？」

「どこでもいい、とにかく遠くだ、二度と目にすることのない遠くにな！」

「承知しましたぁ！」

走り去る二人のスタッフ。

「財津様、縫合完了です」

「うむ」

手術室にスタッフが入ってくる。

「財津様、ガイガーカウンターお持ちしました」

「なに？ もうすでに測ったぞ？」

「あ、反応があります！」

「なんだと？」

「この水差しです。中に何か入っています」

途端、先ほど財津さんにぶちまけられた水差しが破裂し、部屋中が水浸しになる。上から白い布が降ってくる。

「殉愛（仮）はいただいた。ザパン三世。

追伸：頭を冷やすための汚染水は、さぞやお気に召されましたかな？」

「おんのれえ、ザパン、許さんぞ！ 皆殺しだ」

場面転換。

「うまくいったな、ザパン」と雑元。

「だから言ったろ。今回のヤマ、二人の手はわずかせねえって。ザツえもんちゃんも、置物よろしく座って目を光らせるだけで任務完了だったろ？ ま、予告時間はずれちまったけどよ」

「やっこさんの驚いた顔、見物だったぜ。しかし体の中にダイヤを隠すなんざ、また悪趣味なこった。よく調べたな、ザパン」と雑元。

「いや、どっからどう調べても殉愛（仮）の隠し場所だけはわかんなくてよ、直接聞くしかねえべって乗り込んでみたんだわ」

「なんだと？ マジでか、ザパン、そんな見切り発車に今回、俺たちを巻き込んでたのか？」

「では、あのとき拙者に波紋がどうか言っていたのは」

「ぜえんぶあの場で思いついたハツタリよ。財津さんが摘出して言ったから、ホレ、真珠みたいにアソコに入れてんのかと思ってカマかけてみたんだが。思わぬオカマ掘り当てちゃったわ」

「なんだそりゃ、相変わらず雑だなおい。しかしよく偽物のダイヤなんかで財津さんを騙せたな」

「あれれ？ あれを偽物って言うようじゃ、さすがの雑元様も毫碌してきたんじゃないかねえの？ あれは本物のダイヤよ」

「なんだって？」

「なあに。殉愛（仮）の在り処はわからねえが、ただカッティングの特徴だけはいくらでも調べられたからよ。昔盗んだ、殉愛（仮）より倍ぐらいでけえダイヤを闇ルートで職人にカッティングさせたんだわ、殉愛（仮）そっくりにな。今回のヤマ、そりゃ高くついたぜ」

「マジでかザパン、ダイヤ削ってまで、今回のヤマ、無駄にもほどがあるぞ」

「無駄じゃねえよ、雑元。あの財津さんは他人を殺して略奪した殉愛（仮）をさも自分の物のように喧伝した上、財津屋敷には何人たりとも盗みに入れませんって雑誌で豪語してたんだぜ。それをこの俺様が盗まずに誰が盗むよ」

「かー。バカだよザパンおめえわ。付き合わされるこっちの身にもなれってんだ。そうだろ、ザツえもん」

「確かに雑な計画ではござるが、拙者、今回は報酬さえもらえれば文句はないでござる」

「雑じゃねえよお二人さん、ちゃんと半年かけたんだから。ニセの殉愛（仮）でモノホンの在り処を探り出す。まさか財津さんが先にその手でザカジンを誘い出すとは思わなかったが。ま、目には目を、偽物には偽物を、ってか？」

「なんてグダグダ言ってる暇はねえみてえだぞ。奴ら来やがったぞ、ザパン」

戦車で追いかけてくる傭兵たち。逃げるフィアット。急に横から出て来た戦車に追い詰められたと思いきや、出てきたのはザニ形のとつっあんたちのパトカー。

「ザパアアン、たいほだああ！」

妙に棒読みのとつっあん。

「やばいぞ、とつっあんだ！」と雑元。

「オッケーオッケー、そうこなくっちゃ」とザパン。

「まてえい、ザパアアン」とザニ形。

「ザニ形警部、ザパンは我々が捕獲する、この国で邪魔はやめたまえ。さもなくば君たちも巻き添えをくうぞ！」財津さんが戦車のスピーカーから叫ぶ。

「いいええ、わたあしはインターポールから任命を受けて、ザパアンを捕まえにきたのであります。そちらこそ、邪魔はやめてくださあい」トラメガで叫び返すザニ形。

「かまわん、打て！」戦車から砲弾をぶっ放す傭兵たち。上空に戦闘ヘリもやってきて、様々な武器で攻撃する。

「ありやりや、市街地でそんな武器を使うとは。財津さん、国際法違反で重罪でありますよお。私は警部として、見て見ぬふりはできませんよお」

「君はここでザパンと共に死ぬのだ、ザニ形君。あの世から好きなだけ見張ってくれたまえ」
ザニ形、口調が本気に戻る。

「インターポールから任命された私を脅しましたな、財津さん。あんた、本当に腐ってますな」
「知るか、寝言はあの世で言え！」と財津さん。

「あなたこそ、国際法廷で同じことが言えるかしら？」ザジ子、付近の屋根の上からバイクで飛び降り、ザパンと並走する。手にはビデオカメラとボイスレコーダーを持っている。後部シートにはザカジンが乗っており、ザジ子にしっかりつかまっている。

「しっかり記録させてもらったわ」

「ザジ子ちゃん、タイミングばっちし。ちゃんとザニ形のとっつぁんも連れて来てくれてサンキューちゃん」

「それはザカジンのおかげよ。彼がインターポールに証言してくれたおかげで、ザパンの濡れ衣も晴れたわ」

戦闘ヘリからのミサイルをハンドルさばきで華麗によけながら、

「そりゃよかった。しかしその後部シートの男はなに、ちょっとぴったりくっつき過ぎじゃないの？」とザパン。

「あら、ヤキモチ？ それよりも、あたしにくれる予定のダイヤはちゃんと盗み出せたの？」

「え、それはまあ……」慌てるザパン。

「くれる予定だと？ ザパン、おまえマジの話か？」と雑元。

「聞き捨てならないでござるよ、ザパン。拙者、タダ働きするくらいならここから徒歩で帰るでござる」車から飛び降りようとするザツえもん。

「違うって。ザジ子ちゃん、何もこんな時にそんなこと言わないでさあ、全部あげるとは言っていないし」

仲良くもめながら、戦車の砲弾を避けて土壁を駆け上がり、ヘリを雑元のバズーカで撃退するザパン一味。

「あら、そうだったかしら」

そうこうするうちに、財津さんが乗る巨大な戦車に変形し、戦闘ロボットとなってザパンの前に立ちはだかる。「ザパン、ザカジン、おまえら、ここで終わりだ！」

「おいザパン、もしやあのロボも」と雑元。

「おお、初耳ならぬ初お目目よ。あんなの、聞いてないよ～」

「この肝心な場面でまた油断とは、ダメよダメダメでござるよ！」

「ちょっとケンカしてる場合じゃない、キャー！」

窮地に陥るザパン一味。戦闘ロボットの攻撃でザジ子ちゃんが転倒する。

「ザジ子！」叫ぶ、ザパン。

「わはははは」笑う財津さん。

「ザジ子は俺にまかせろ、ザパン、あのロボをなんとかしろ！」

ザカジン、ザジ子ちゃんを後部シートに乗せ、バイクを運転する。

「おお。もっちのろんだのクラッカーよ！ アルセーヌ家に、生まれた、男や、さかいにい！」

「それは別な人の歌！」全員つつこみ。

「ザパン、これをつかえ！」フィアットでロボに突っ込むザパンに向け、十手を投げるザニ形。

「この土壇場で十手って。とつつあん、使い道あるこれ？ あ、そうだ！」

十手の鉤にニセの殉愛（仮）を無理くりはめ込む。

「どうすんだそれ、ザパン」と雑元。

「え〜と、え〜と、えいっ！」とりあえず財津さんに向けてぶん投げてみるザパン。

「マジかザパン、雑にもほどがあるだろ！」と雑元。

「あれは、私の殉愛（仮）！」と財津さん。

ロボが十手に向かって突進する。更に掴もうとするアームをスルリとすり抜けた十手が、操縦席のガラスを突き破る。勢いでダイヤが飛び出し財津さんの額に突き刺さる！

「うぎゃー！」財津さんの絶叫。

場面転換。

病室。

「もうだいぶよくなったみたいね、ザカジン」

ザカジンの病室を訪れる、ザジ子ちゃん。

「……いろいろ、世話に、なった。ありがとう」うなだれて、礼を言うザカジン。

「あら、お礼なんていいのよ。それよりも、これ、預かってきたの」

ザジ子ちゃん、ハンドバッグからダイヤを取り出し、ザカジンに手渡す。

「これは……」

「財津さんには無理だったけど、これが本物の殉愛（仮）かどうか、あなたなら一目でわかるはずだって。ザパンからよ」

「ザパンが？ なぜ？」

ザジ子、咳払いして、

「ん、ゴホン。（声色をマネして）俺様みたいなコソ泥にとっちゃ、盗むまではお宝だが、手に入ったらもうありきたりなただの石コロよ。ですって。ホントもったいない。ま、あたしはニセの方のダイヤをもらったから文句はないけどね。それじゃ、ちゃお！」

「待て、なぜだ、命がけで盗んだのに、ザパンはなぜこんなバカげたマネを。……同情か？」

「そうねえ、あたしはザパンじゃないから本心はわかんないけど。ザパンにとっては、それが本

当にただキラキラ光るだけのいらぬ石コロだから、じゃないかしら」

「石コロ……」殉愛（仮）を見つめる、ザカジン。

「でもザカジン、あなたにとってそのダイヤは、一族の誇りであり、家族の思い出が詰まった形見なんでしょ？」

ねえ。ザパンにとって盗むって行為は、道楽っていうよりは、生き様そのものなのよ。ノー盗み、ノーライフね」

目を上げる、ザカジン。

「……ザパンは、今どこに」

「空港よ、今日の便で帰国するの」

ベッドの上に新聞。タンカで運ばれる財津さんを逮捕したザニ形警部のVサイン写真が、新聞の一面を飾っている。

「財津さんの悪事をザニ形警部が暴く、か。お、財津さんの保険金詐欺事件についても載ってるぞ。なにに、ザパンに盗まれたと見せかけてダイヤの保険金をだまし取ろうとした財津さんだが、結局ザパンに本物の殉愛（仮）を盗まれる、か。これで一件落着だな、ザパン」

雑元、広げていた新聞を閉じてザパンを見る。

空港にて、飛行機を待つザパン。タバコをくゆらせている。

「まあな」

「なんだ、浮かねえ顔して」

「いや、なに、大したことじゃねえが」

タバコをもみ消すザパン。雑元、電光掲示板を見ながら、

「そろそろ出発だな。行くか、ザパン」

「ああ」

「ザパン」 ザツえもん、隣で胡坐をかいたまま、ザパンに流し目で呼びかける。

その視線の方向に、ザカジンが立っている。

「俺は、お前を認めない！」叫ぶザカジン。「道楽なんかで盗みをする奴を、俺は絶対許さない！」その手に殉愛（仮）を握りしめている。

「なんだあいつ。おい！」ザカジンに向かおうとする雑元を、手で制すザパン。

「いいのか？」いぶかしがる雑元。

黙ってザカジンに背を向け、搭乗口へ歩き始めるザパン一行。

「俺は、お前らを認めたら生きていけない！お前らを認めたら、殺された家族や仲間たちに、合わす顔がない！」叫び続けるザカジン。

「俺は、お前に、お前らに感謝なんて……」うつむいたザカジンから滴る涙が、握りしめた殉愛（仮）に落ちる。

「アバヨ！」右手を上げ、背中で別れを告げるザパン。口元に笑み。

スタッフロール。（ってかスタッフって、G+Uのみだけど）

スタッフロール中に、機内の三人の会話。

「ザパン。拙者、一つ気になったことがあるでござるが」

「ん、なんだ、ザツえもん」とザパン。

「さっきザカジンが握りしめていたダイヤでござるが、あれは、拙者に内緒で本物を勝手に渡したでござるか？」

「え、あれ？ いや、どうだったかな」とぼけるザパン。

「あ、そうだぞザパン。俺も気になってたが、ニセの殉愛（仮）もフジ子に貢ぎやがって、ってことはもしや、お前今回収穫なしじゃあるまいな？」

「ザパン、言いにくいでござるが、もし今回の報酬を踏み倒すような狼藉を働く場合は、拙者、この飛行機をただでは帰さんでござるよ」

「ちょっと、なに物騒なこと言いだしちゃったのザツえもんちゃん。あれれ？」

そこにちょうど通りがかるCA。

「あ、そこの美人のお姉さん！ オレンジジュース、プリーズ！」

お姉さんに手を伸ばすザパン。その腕に手錠かかる。

「んもう、美人ってあたしのこと？ 逮捕しちゃう♡」

ごっつい美人が振り返ると、案の定、ザニ形のとつつあん。

「とつつあん、なんでそんなバカな真似を！」

「がっはっは、敵を欺くにはまず自分から。自分の気持ちを偽って女装したまでよ。そんなことより、ザパン、逮捕よ！」

「あら、気持ちを偽ってって言う割には、女装がとってもお似合いなことよ。おほほほほ」とザパン。するっと手錠を抜く。

「それで拙者を誤魔化せるとするか、ザパン！」ザツえもんの目がギラリと光り、雑鉄剣の居合切り。目にも留まらぬ早業で、ザパンたちの座る座席部分だけがくりぬかれ、飛行機から落ちる。機内、パニックに。

「ありゃりゃザツえもんちゃん、飛行機斬っちゃってどないするのよ」

「待てー！ ザパーン、逮捕だー！」飛行機から飛び降りるザニ形警部。

「とつつあんもしつつこいよ！」

「男ってみんなこう。しょうがないわね、ったく」一人乗りのセスナでそばを通るザジ子。

「あ、ザジ子ちゃん、助けて、お願い〜い！」

「待てえ、ザパン、逃げる気か！」とザニ形警部。

「ザパン、責任とってもらおうぞ！」と雑元。

「拙者に分け前を！」と雑元。

「ひー、みんな落ち着いて。落ちるー！ これが本当のオチがつく、ぬあんちって！」

「ザパーン！」一同つつこむ。

(20年前くらいに思いついたルパン三世の二時間スペシャルを、雑パン三世へと雑化いたしました。リサイクルという以上に、深い意味はありません。あしからず)



考えるウマシカ～第十九回 『殉愛』と雑パン三世（仮）～

<http://p.booklog.jp/book/92709>

著者：弦楽器イルカ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/92709>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/92709>



電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ